

日蓮大聖人御書全集

さ ど ご し ょ

佐渡御書

新版

1284

§

1291

さ ど ご し ょ

佐渡御書

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

もんかいちどう

文永 9年

('72)

3月 20日

51歳

門下一同

じゅうろうにゅうどうどのとう

棟

あまごぜん

いちいち

み

たも

この文は富木殿のかた、三郎左衛門殿、大蔵とうのつじ
十郎入道殿等、さじきの尼御前、一々に見させ給うべき

人々の御中へなり。

きょう かまくら いくさ し

ひとびと か

つ

給

そうちら

京・鎌倉に軍に死せる人々を書き付けてたび候え。

げてんしょう

もんぐ

に

げん

し

ほんまつ

かんもん

せんじとう

外典抄、文句の二、玄の四の本末、勘文・宣旨等、これへ

ひとびと 持

渡

たま

の人々もちてわたらせ給え。

世間に人の恐るるものは、火炎の中と、刀剣の影と、この
身の死するとなるべし。牛馬なお身を惜しむ、いわんや人身
をや。癩人なお命を惜しむ、いかにいわんや壯人をや。

仏説いて云わく「七宝をもつて三千大千世界に布き満つ
るとも、手の小指をもつて仏経に供養せんにはしかず」取意。

雪山童子の身をなげし、樂法梵志が身の皮をはぎし、身命
に過ぎたる惜しきもののなければ、これを布施として仏法を
習えば必ず仏となる。身命を捨てたる人、他の宝を仏法に
惜しむべしや。また、財宝を仏法におしまんもの、まさる
勝

身命を捨つべきや。世間の法にも、重恩をば命を捨てて報するなるべし。

また、主君のために命を捨つる人はすくなきようなれども、その数多し。男子ははじに命をすて、女人は男のために命をすつ。

魚は命を惜しむ故に、池にすむに池の浅きことを歎いて、池の底に穴をほりてすむ。しかれども、えにばかされて釣を飲む。鳥は木にすむ。木のひききことをおじて、木の上枝にすむ。しかれども、えにばかされて網にかかる。人もまたかすむ。

せけん あさ

しんみよう うしな

だいじ

くのべ」とし。世間の浅きことには身命を失えども、大事の
仏法などには捨つること難し。故に仏になる人もかかる
べし。

仏法は摄入・折伏時によるべし。譬えば、世間の文武二道
のべ」とし。されば、昔の大聖は時によりて法を行ず。

雪山童子・薩埵王子は、「身を布施とせば法を教えん。菩薩
の行となるべし」と責めしかば、身をすつ。肉をほしがら
ざる時、身を捨てべきや。紙なからん世には身の皮を紙と
し、筆なからん時は骨を筆とすべし。破戒・無戒を毀り、

持戒・正法を用いん世には、諸戒を堅く持つべし。儒教・
道教をもつて釈教を制止せん日には、道安法師・慧遠
法師・法道三藏等のごとく、王と論じて命を軽うすべし。
釈教の中に、小乗・大乗、權經・實經雜乱して、明珠
と瓦礫と、牛・驢の一乳を弁えざる時は、天台大師・伝教
大師等のごとく、大小・權實・顯密を強盛に分別すべし。
畜生の心は、弱きをおどし、強きをおそる。当世の学者
等は畜生のごとし。智者の弱きをあなざり、王法の邪を
おそる。諛臣と申すはこれなり。強敵を伏して始めて力士を
恐

しる。
知

あくおう しょうほう やぶ

じやほう そうとう

かとうび

ちしゃ

悪王の正法を破るに、邪法の僧等が方人をなして智者を

もの かなら ほとけ

かなら とくじう 成

失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず仏

になるべし。例せば日蓮がごとし。これおごれるにはあらず。

正法を惜しむ心の強盛なるべし。

おごれる者は、必ず、強敵に値つておそるる心出来す

るなり。例せば、修羅のおごり、帝釈にせめられて、無熱池

の蓮の中に小身と成つて隠れしがごとし。正法は、一字
一句なれども、時機に叶いぬれば必ず得道なるべし。千經

まんろん しゅうがく

じき そうい

かな

万論を習学すれども、時機に相違すれば叶うべからず。

にじゅうろくねん ことしにがつじゅういちにち ジゅうしちにち
ほうじ かつせん にょらい しようほう やぶ

宝治の合戦すでに二十六年。今年一月十一日、十七日、

かつせん

げどう

あくにん

によらい

しおほう

やぶ

また合戦あり。外道・悪人は如來の正法を破りがたし。仏

で し と う

かなら

ぶつぱう

やぶ

弟子等、必ず仏法を破るべし。「師子身中の虫の師子を食む」

とううんぬん

だいかほう

ひと

ほか

かたき

破

し し し し し し

は

等云々。大果報の人をば他の敵やぶりがたし、親しみより破

やくしきよう

い

じかいほんぎやく なん

るべし。薬師経に云わく「自界叛逆の難」と、これなり。

にんのうきょう

い

しょうにんさ

とき

しちなんかなら

お

仁王経に云わく「聖人去らん時は、七難必ず起こらん」

うんぬん

こんこうみようきょう

い

さんじゅうさんてん

おのおのしんこん

しょう

云々。金光明経に云わく「三十三天、各瞋恨を生ず

こくおう

あく

ほしいまま

じ

よ

とううんぬん

るは、その国王、惡を縦にし、治せざるに由る」等云々。

にちれん しょうにん

日蓮は聖人にあらざれども、法華経を説のべとく受持すれば

聖人のごとし。

また世間の作法兼ねて知るによつて注し

置くこと、これ違うべからず。

現世に云いおく言の違わざ

らんをもつて、後生の疑いをなすべからず。

にちれん

日蓮は、この関東の御一門の棟梁なり、日月なり、龜鏡な

がんもく

り、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難必ず起ころべしと、去年

くがつじゅうににち

九月十二日、御勘氣を蒙りし時、大音声を放つてよばわ

りしこと、これなるべし。わずかに六十日乃至百五十日に、

この事起ころか。これは華報なるべし。実果の成ぜん時、

ことお

けほう

じつか

じよう

とき

ほけきよう せつ

じゅじ

じゅじ

しる

ば聖人のごとし。また世間の作法兼ねて知るによつて注し

たが

げんぜ

い

ことば

たが

置くこと、これ違うべからず。

ごしよう

うたが

げんぜ

い

ことば

たが

ごしよう

うたが

らんをもつて、後生の疑いをなすべからず。

にちれん

日蓮は、この関東の御一門の棟梁なり、日月なり、龜鏡な

がんもく

り、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難必ず起ころべしと、去年

くがつじゅうににち

九月十二日、御勘氣を蒙りし時、大音声を放つてよばわ

りしこと、これなるべし。わずかに六十日乃至百五十日に、

この事起ころか。これは華報なるべし。実果の成ぜん時、

ことお

けほう

じつか

じよう

とき

歎

いかがなげかわしからんずらん。

せけん ぐしゃ おも

にちれんちしゃ

なん おうなん

世間の愚者の思に云わく「日蓮智者ならば、何ぞ王難に

もう

にちれんか

ぞんち

ふぼ

う こ

値うや」など申す。日蓮兼ねての存知なり。父母を打つ子

ほとけ

あらかん

ち

い もの

あり、阿闍世王なり。仏・阿羅漢を殺し、血を出だす者あ

ほとけ

あらかん

ち

い もの

り、提婆達多これなり。六臣これをほめ、瞿伽利等これを悦

ほとけ

あらかん

よろこ

ぶ。日蓮、当世にはこの御一門の父母なり、仏・阿羅漢の

ほとけ

あらかん

よろこ

ごとし。しかるを、流罪し、主従共に悦びぬる。あわれ

ほとけ

あらかん

よろこ

に無慚なる者なり。謗法の法師等が、自ら禍いの既に顕

ほとけ

あらかん

よろこ

るるを歎きしが、かくなるを一旦は悦ぶなるべし。後には

ほとけ

あらかん

よろこ

のち

かれ なげ にちれん いちもん おと れい やすひら
彼らが歎き、日蓮が一門に劣るべからず。例せば、泰衡が弟
しようとを討ち、九郎判官を討つて悦びしがごとし。既に
一門を亡ぼす大鬼のこの国に入るなるべし。法華経に云わ
く「悪鬼はその身に入る」、これなり。

にちれん
責
せんごう
日蓮もまた、かくせめらるるも、先業なきにあらず。不輕品
に云わく「その罪は畢え已わつて」等云々。不輕菩薩の無量
の謗法の者に罵詈・打擲せられしも、先業の所感なるべし。
いかにいわんや、日蓮、今生には貧窮・下賤の者と生まれ、
旃陀羅が家より出でたり。心こそすこし法華経を信じたる
せんだら
いえ
い
こころ
少
ほけきょう
しん

ようなれども、身は人身に似て畜身なり。魚鳥を混丸して
しゃくびやくにたい

赤白二滯とせり。その中に識神をやどす。濁水に月の
映

うつれるがごとし。糞囊に金をつつめるなるべし。心は
ほけきょう しん ゆえ ぼんてん たいしゃく おそ おも み

法華經を信する故に梵天・帝釈をもなお恐ろしと思わず。身
ちくしょう み しきしんふそうおう ゆえ ぐしや 侮 どうり み

は畜生の身なり。色心不相応の故に、愚者のあなざる道理
こころ み たい つき こがね 譬

なり。心もまた身に対すればこそ月・金にもたとうれ。
かこ ほうぼう あん たれ 知 しょういびく たましい るるい

また過去の謗法を案するに、誰かしる、勝意比丘が魂に
だいてん たましい しつしん

もや、大天が神にもや、不輕輕毀の流類なるか、失心の
よざん ごせんじょうまん けんぞく よりゅう

余残なるか、五千上慢の眷属なるか、大通第三の余流にも

だいつうだいさん よりゅう

しゅくじょう 計

やあるらん。宿業はかりがたし。

くろがね

きた

う

つるぎ

けんしょう めり

めり

こころ

鉄は炎い打てば剣となる。賢聖は罵詈して試みるな

われ

こんど

ごかんき

せけん

とがいちぶん

のが

るべし。我、今度の御勘気は、世間の失一分もなし。ひとえ

せんじょう

じゅうざい

こんじょう

け

ごしよう

さんあく

のが

に、先業の重罪を今生に消して、後生の三悪を脱れんず

るなるべし。

はつないおんぎょう

い

とうらい

よ

かり

けさ

き

般泥洹經に云わく「當來の世、

わ

かり

けさ

き

わ

ほう

仮に袈裟を被て、我が法

わ

かり

けさ

き

の中において出家・学道し、

わ

かり

けさ

き

けたい

し

ほうどうがいきょう

ひぼう

まさ

し

方等契經を誹謗することあらん。當に知るべし、これらは

わ

かり

けさ

き

ほう

まき

ほうどううんぬん

もろもろ

いどう

やから

きよう

もん

きょうもん

皆、これ今日の諸の異道の輩なり」等云々。この經文を

みな

こにち

いどう

やから

とううんぬん

み もの 恥 いまわれ しゅつけ けさ 懸

見ん者、自身をはずべし。今我らが出家して袈裟をかけ、

らんだけたい ほとけざいせ ろくしげどう でし ほとけ

懶惰・懈怠なるは、これ仏在世の六師外道が弟子なりと仏
しる たま ほうねん いちるい だいにち いちるい ねんぶつしゅう ぜんしゅう ごう
記し給えり。法然が一類、大日が一類、念佛宗・禅宗と号

して、法華経に「捨閉閣拋」の四字を副えて制止を加えて、
ごんきょう みだしようみよう しじそ せいし くわ

權教の弥陀称名ばかりを取り立て、「教外に別伝す」と号
ほけきょう つき 指 ゆび もんじ 数

して、法華経を「月をさす指、ただ文字をかぞうる」なん
わら もの ろくし まつりゆう ぶつきよう なか しゅつたい ごう

ど笑う者は、六師が末流の仏教の中出來せるなるべし。
ねはんぎよう ほとけこうみよう はな ち した

うれえなるかなや、涅槃経に仏光明を放つて地の下
いっぴやくさんじゅうろくじごく て たも ざいにんいちにん

一百三十六地獄を照らし給うに、罪人一人もなかるべし。

ほけきょうう

じゅりりょうほん

みなじょうぶつ

ゆえ

法華經の寿量品にして皆成仏せる故なり。ただし、

いつせんだいにん

もう

ほうぼう

もの

じごくもり

とど

一闡提人と申して、謗法の者ばかり地獄守に留められたりき。

かれ

生

広

いま

よ

にほんこく

いつさいしゅじょう

彼らがうみひろげて、今の世の日本國の一切衆生となれる

なり。

にちれん

かこ

しゅうじ

ほうぼう

もの

こんじょう

日蓮も、過去の種子すでに謗法の者なれば、今生に

ねんぶつしゃ

すうねん

あいだ

ほけきょう

ぎゅじや

み

念佛者にて、数年が間、法華經の行者を見ては、「いまだ

ひとり

う

ものあ

せん

なか

ひと

な

とう

わら

一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」等と笑いしな

いま

ほうぼう

よ

み

さけ

よ

もの

ふ

ぼう

り。今、謗法の酔いさめて見れば、酒に酔える者、父母を打

ようこ

のちなげ

なげ

つて悦びしが、酔いさめて後歎きしがごとし。歎けども

かい つみき かこ ほうぼう

甲斐なし。この罪消えがたし。いかにいわんや、過去の謗法
の心中にそみけんをや。経文を見候えば、鳥の黒きも鷺
の白きも先業のつよくそみけるなるべし。外道は知らずして
自然と云い、今の人は謗法を顕して扶けんとすれば、我が
身に謗法なき由をあながちに陳答して、「法華経の門を閉じ
よ」と法然が書けるを、とかくあらがいなんだす。念佛者は
さておきぬ、天台・真言等の人々、彼が方人をあながちに
するなり。

ことししようがつじゅうろくにち じゅうしちにち さどのくに ねんぶつしやとうすうひやくにん
今年正月十六日、十七日に、佐渡国の念佛者等数百人、

印性房と申すは念佛者の棟梁なり、日蓮が許に来つて云
わく「法然上人は法華經を抛てよとかかせ給うにはあら
ず。一切衆生に念佛を申させ給いて候 この大功德に
御往生疑いなしと書き付けて候を、山僧等の流されたる、
ならびに寺法師等、『善きかな、善きかな』とほめ候を、
いかんがこれを破し給う」と申しき。鎌倉の念佛者よりも、
はるかにはかなく候ぞ。無慙とも申すばかりなし。
いよいよ日蓮が先生・今生・先日の謗法おそろし。か
かりける者の弟子と成りけん、かかる国に生まれけん、い

かになるべしとも覚えず。

はつないおんぎょう

い

ぜんなんし

かこ

むりよう

しょざい

しゅじゅ

おぼ

般泥洹經に云わく「善男子よ。過去に無量の諸罪、種々の

あくびょう つぐ

もろもろ

ざいほう

おんじき そそ

たから もと

きょうい

悪業を作るに、この諸の罪報は、あるいは軽易せられ、あるいは形狀醜陋、衣服足らず、飲食麤疎、財を求むるに利

ひんせん
いえ

じやけん
いえ

おんじき
う

おうなん

り

あらず、貧賤の家および邪見の家に生まれ、あるいは王難に遭う」等云々。また云わく「および余の種々の人間の苦報あ

とううんぬん

い

よ

よ

にんげん

くほう

らん。現世に軽く受くるは、これ護法の功德力に由るが故なり」等云々。この経文は、日蓮が身なくば、ほとんど仏の

もうご

いち

み

み

きょうい

に

妄語となりぬべし。一には「あるいは軽易せらる」「二には

「あるいは形狀醜陋」、三には「衣服足らず」、四には「飲食
麤疎」、五には「財を求むるに利あらず」、六には「貧賤の家
に生まる」、七には「および邪見の家」、八には「あるいは王難
に遭う」等云々。この八句は、ただ日蓮一人が身に感ぜり。
高山に登る者は必ず下り、我人を軽しめば還つて我が身
人に轻易せられん。形狀端嚴をそしれば醜陋の報いを得。
人の衣服・飲食をうばえれば必ず餓鬼となる。持戒・尊貴を笑
えれば貧賤の家に生ず。正法の家をそしれば邪見の家に生
ず。善戒を笑えば国土の民となり王難に值う。これは常の

因果の定まれる法なり。

いんが にちれん

いんが さだ ほう

日蓮はこの因果にはあらず。法華経の行者を過去に軽易

ゆえ

ほけきよう つき つき

なら

ほし ほし

連

せし故に、法華経は、月と月とを並べ、星と星とをつらね、

かざん

かざん

重

たま たま

連

華山に華山をかさね、玉と玉とをつらねたるがごとくなる

おんきよう

あ

御経を、あるいは上げ、あるいは下して嘲弄せし故に、

はつしゅ

だいなん あ

はつしゅ

じんみらいさい あいだ

ゆえ

この八種の大難に値えるなり。この八種は、尽未來際が間

ひと

げん

強

ほけきよう

かたき

せ

一つずつこそ現すべかりしを、日蓮つよく法華経の敵を責

いちじ

あつ

お

たと

たみ

ごうぐん

むるによつて一時に聚め起こせるなり。譬えば、民の郷郡な

りせん

じとうとう

課

んどにあるには、いかなる利錢を地頭等におおせたれども、

甚

責

ねんねん 延

ところ

い

とき

きそ

お

いたくせめず、年々にのべゆく。その所を出する時に競い起
こるがごとし。「これ護法の功德力に由るが故なり」等はこ
れなり。

法華経には「諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、刀杖・
瓦石を加うるもの有らん乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向
かつて乃至しばしば擯出せられん」等云々。獄卒が罪人を責
めば、地獄を出する者かたかりなん。当世の王臣なくば、
日蓮が過去謗法の重罪消し難し。

日蓮は過去の不軽のごとく、当世の人々は彼の輕毀の四衆
にちれん かこ ふきょう とうせい ひとびと か きょうき しそゆ

のこと。人は替われども因はこれ一なり。父母を殺せる人
こと ひと か いん ふぼ ころ ひと

異なれども、同じ無間地獄におつ。いかなれば、不輕の因を
ぎよう にちれんいちにんしやかぶつ おな むけんじごく 隘

行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき。また彼の諸人は
ばつだばらとう い か しょにん

跋陀婆羅等と云われざらんや。ただ千劫阿鼻地獄にて責め
ふびん 覚

られんことこそ不便にはおぼゆれ。これをいかんとすべき。
か きょうき しゅ はじ ぼう

彼の輕毀の衆は、始めは謗ぜしかども、後には信伏隨從せ
つみたぶん めつ しきうぶん あ のち しんぶくずいじゅう

りき。罪多分は滅して少分有りしが、父母千人殺したる程
だいく 受 とうせい しょにん ひるがえ こころ ふ ぼせんにんこころ ほど

の大苦をうく。当世の諸人は翻す心なし。譬喻品のごと
く無数劫をや経んずらん、三・五の塵点をやおくらんずら
むしゅこう へ さん ご じんてん ひゆほん 送

ん。

これはさておきぬ。日蓮を信するようなりし者どもが、
にちれん 置 にちれん しん もの
日蓮がかくなれば、疑いをおこして法華経をすつるのみな
にちれん うたが 起 にちれん うたが おも もの
らす、かえりて日蓮を教訓して我賢しと思わん僻人等が、
ねんぶつしや ひさ あびじごく われかしこ ふびん もう
念仏者よりも久しく阿鼻地獄にあらんこと、不便とも申すば
かりなし。

しゅら ほとけ じゅうはつかい われ じゅうくかい
修羅が「仏は十八界、我は十九界」と云い、外道が云わ
ほとけ いちくきようどう われ くじゅうごくきようどう
く「仏は一究竟道、我は九十五究竟道」と云いしがごとく、
にちれんごぼう ししょう あま 強 われ

「日蓮御房は師匠にてはおわせども余りにこわし。我らは

柔

ほけきょう ひろ

い

ほたるび

にちがつ

笑

ありづか かざん くだ

せいこう

かかい

悔

かささぎ

やわらかに法華經を弘むべし」と云わんは、螢火が日月を
わらい、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなざり、烏鵲が

らんほう

笑

鸞鳳をわらうなるべし、わらうなるべし。南無妙法蓮華經。

なんみようほうれんげきよう

ぶんえいくねんたいさいみずのえさるさんがつはつか

文永九年太歲壬申三月二十日

日蓮 花押

にちれん かおう

日蓮弟子檀那等御中

さどのがくに かみそらう うえ めんめん もう わざら

佐渡国は紙候わぬ上、面々に申せば煩いあり。一人も

漏

うら

ふみ こころ

ひとり

ひとびと よ

もるれば恨みありぬべし。この文を、心ざしあらん人々は寄

あ

ごらん りょうけんそらう

こころ

慰

たま

せけん

り合つて御覽じ、料簡候いて、心なぐさませ給え。世間に、

勝

なげ

しうつたい

おと

なげ

もの

とうじ

まさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは物ならず。当時の

いくさ

し

ひとびと

じつ

ふじつ

お

幾

かな

軍に死する人々、実・不実は置く、いくばくか悲しかるら

井沢

にゅうどう

酒部

にゅうどう

か

た

ん。いざわの入道、さかべの入道、いかになりぬらん。

河

辺 やましろとくぎょうじどんとう

か

つ

た

かわのべ山城得行寺殿等のこと、いかにと書き付けて給ぶ

げてんしょう

じょうがんせいよう

げてん

ものがたり

はつしゅう

そうでん

べし。外典抄、貞觀政要、すべて外典の物語、八宗の相伝

とう

書

そうちら

構

等、これらがなくしては消息もかれ候わぬに、かまえ

てかまえて給び候べし。

た
そうちら